

新任部長・副部長紹介

■新任部長



6月着任

第1脳神経外科部長
福光 龍
免許取得年／平成16年

9月着任

第2歯科部長
久保田 崇
免許取得年／平成6年

9月昇任

第2放射線科部長
榎林 正流
免許取得年／平成15年

8月着任

外科副部長
小山 幸法
免許取得年／平成15年

行事予定

歯科イブニングセミナー

日時／令和8年1月21日(水)19:00～20:00

会場／福井赤十字病院 栄養管理棟3階 講堂

演題／「歯周病が全身に及ぼす影響について」

講師／歯科・歯科口腔外科学部長 久保田 崇

申込みはこちら



地域がん診療研修会

日時／令和8年2月19日(木)18:30～ ※ハイブリッド開催

会場／福井赤十字病院 管理棟 2階 多目的室

内容／「がんのリハビリテーション診療 最前線

～エビデンスから臨床実践まで～

座長／福井赤十字病院

リハビリテーション科部長 高嶋 理

演者／慶應義塾大学 医学部

リハビリテーション医学教室 教授 辻 哲也 先生

申込みはこちら



新血管撮影室開設記念講演会

日時／令和8年2月10日(火)17:20～19:00

会場／福井赤十字病院 栄養管理棟3階 講堂

【内覧会】福井赤十字病院 新血管撮影室「Azurion7B2015 R3」

【講演会】

講演／「急性期脳卒中に対する当院の取り組み」

講師／福井赤十字病院 脳神経外科部長 福光 龍

特別講演／「脳血管治療の進歩、それに伴う

血管撮影装置選択的重要性」

講師／シミズ病院 院長 坂井 信幸 先生

申込みはこちら



福井赤十字病院

理念

人道・博愛の精神のもと、県民が求める優れた医療を行います。

基本方針

- 患者さんの権利と意思を尊重し、協働して医療を行います。
- 安全と質を向上させ、優しい医療を行います。
- 人間性豊かで専門性を兼ね備えた医療人を育成します。
- 急性期医療・疾病予防・災害時医療に積極的に取り組みます。
- 保健・医療・福祉と連携し、地域社会に貢献します。

開催報告

地域医療連携の会

令和7年度 地域医療連携の会を令和7年7月30日(水)にザ・グランユアーズフクイにて開催しました。当日は、院外61名、院内46名、計107名の先生方にご参加いただき、大変盛大に開催することができました。ご参加いただいた先生方、誠にありがとうございました。

話題提供／

「泌尿器科でのロボット手術」

腎センター長 角野 佳史



炎症性腸疾患イブニングセミナー

標記セミナーを令和7年10月23日(木)に開催しました。消化器内科 永井将也医師より「骨髄異形成症候群を合併した難治性潰瘍性大腸炎の1例」、また、特別講演として愛知医科大学医学部 消化管内科講師 山口純治先生より「潰瘍性大腸炎の外来診療のtips－カログラの使用経験もふまえて－」をテーマとして話題提供いただきました。当日は29名の方にご参加いただきました。



心疾患地域連携アップデートセミナー

標記セミナーを令和7年11月6日(木)に福井県国際交流会館にて開催しました。座長を坪川内科循環器内科医院 院長 坪川俊成先生に務めていただき、吉田博之院長補佐兼循環器内科部長より「地域で支える心不全マネジメント」、坪川明義循環器内科部長より「当院におけるPCI治療の現状」をテーマとしてハイブリッド形式で話題提供いたしました。当日は39名(会場24名、オンライン15名)の方にご参加いただきました。



腎臓・泌尿器科イブニングセミナー

標記セミナーを令和7年12月17日(水)に開催しました。鈴木康倫腎臓・泌尿器科副部長より「紹介症例からみるリウマチ・膠原病内科診療」をテーマとしてハイブリッド形式で話題提供いたしました。当日は32名(会場24名、オンライン8名)の方にご参加いただきました。



Partner

福井赤十字病院連携通信〈パートナー〉

Japanese Red Cross Fukui Hospital vol.085

令和8年1月発行



「雪深き平泉寺」撮影／写真部 リハビリテーション科部 山岸 耕二

新年のご挨拶 2026年(令和8年)

明けましておめでとうございます。連携をお願いしている病院、医院、施設の皆様におかれましては、安らかな新年をお迎えのことと拝察いたします。

令和7年(2025年)は、当院にとって特別な年でした。大正14年(1925年)に創立され、100周年を迎えることができました。100年の永きに渡り地域の診療に携わってこれまでましたのも、周囲の皆様の温かいご支援あってのことと、まずは篤くお礼申し上げます。

令和8年(2026年)、地域医療構想に関して最初の着地点を迎える年です。すでに令和22年(2040年)を目指した次世代の地域医療構想に関する検討も始まっています。全国的に少子高齢化が進み、複数の基礎疾患をかかえ、さまざまな社会背景を併せ持つ高齢の患者さんが増えてま

ります。

当院は地域における基幹病院として、高度急性期、急性期の医療を中心に据えておりますが、周囲の医療機関と協力し、時代の変化に柔軟に対応してまいります。

末筆ながら連携をお願いしている皆様のご多幸をお祈り申し上げますとともに、当院への一層のご支援をお願い申し上げ、新年のご挨拶といたします。



院長 小松 和人

地域医療連携課
受付時間／平日 8:15～18:30、土曜 8:30～12:30
TEL 0776-36-4110(直通)
FAX 0776-36-0240(専用)

福井赤十字病院

<https://www.fukui-med.jrc.or.jp>
e-mail renkei@fukui-med.jrc.or.jp
連携通信第85号発行 令和8年1月 福井赤十字病院



経腔的腹腔鏡手術(vNOTES)について ～お腹に傷がない 低侵襲手術～

私たち、体への負担が少ない手術で婦人科疾患を治療することに力を入れてきました。最近、侵襲を最小限に抑えた「vNOTES(バイノーツ)」という手術を始めましたのでご紹介します。

vNOTESとは

経腔的腹腔鏡手術(vNOTES: Vaginal Natural Orifice Transluminal Endoscopic Surgery)は、腹部に傷を作らずに行う内視鏡手術の新しい方法です。腔の奥(前後腔円蓋部)を入口とし、腹腔鏡や手術器具を挿入して手術を行います(図1)。手術の際には、vNOTES用のプラットホーム(図2)を腔に装着します。対象疾患は、子宮筋腫や卵巣腫瘍、子宮脱などの良性疾患で、子宮全摘や腫瘍摘出、腔断端の吊り上げなどを行うことができます。

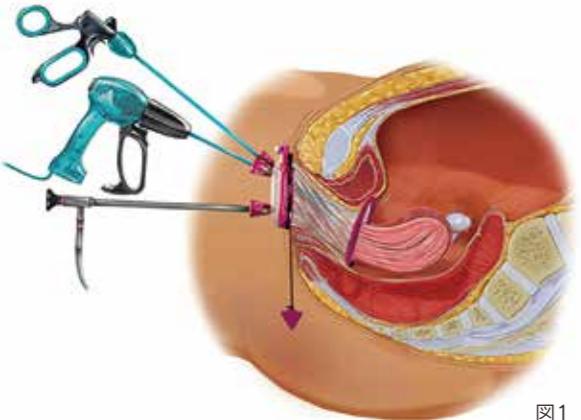


図1



図2

イラスト画像提供:applied medical社



産婦人科部長
田嶋 公久

vNOTESのメリット

従来の開腹手術、腹腔鏡手術に比べて、腹壁に傷がないことが最大の利点で、術後の痛みが少なく回復が早いという特徴があります。また、若年層や美容意識の高い患者さんにとっては、傷跡が残らず美容面で優れます。伝統的な腔式手術と比較しても、vNOTESでは腹腔内を広く鮮明な画像で確認しながら手術ができるため、より正確で安全な操作が可能です。

vNOTESの留意点

高度な癒着がある場合や病変が非常に大きな症例では、手術が難しい場合があります。術前の内診やMRI検査でvNOTESの適応を判断しますが、術中に癒着などが判明した場合でも、従来の腹腔鏡手術に途中から移行することができます。

vNOTESは、腔式手術と腹腔鏡手術の良い点を組み合わせた手術です。そのため、術者には両方の手術の技術と経験が不可欠です。当院では、これらの手術に習熟した経験豊富な医師が手術を行っています。

このような新しい技術を取り入れながら、これからも患者さんに優しい手術を進めてまいりますので、患者さんのご紹介をお願いいたします。

総合診療科の立ち位置 ～患者さんを 包括的に診療する～



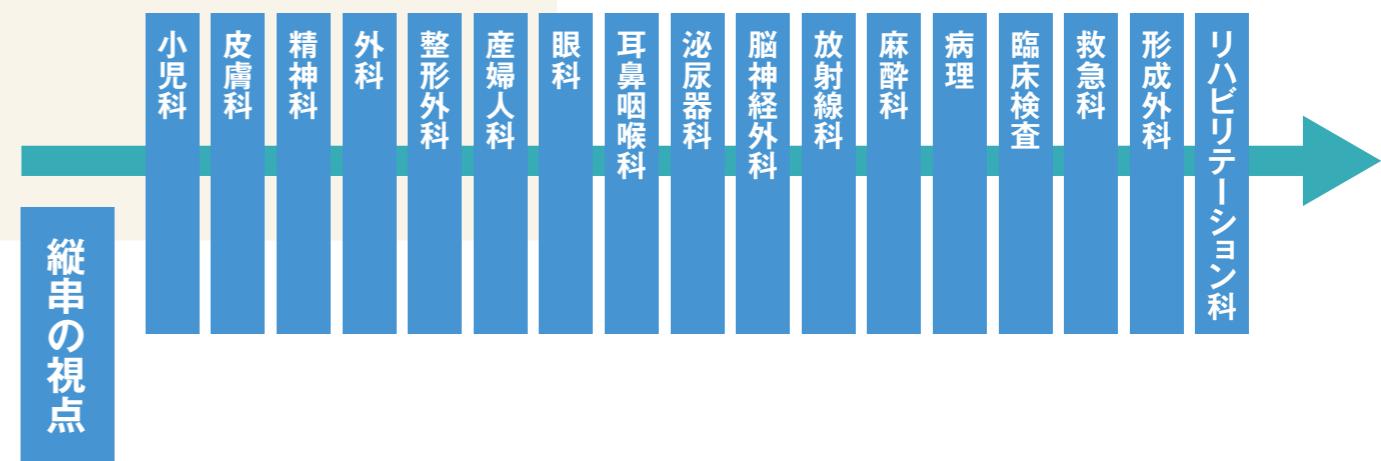
総合診療科部長
道上 学

臓器別の専門科の医療は日々進歩し、新たな知見や技術の登場によって、患者さんに新たな恩恵をもたらしています。ただ、高齢になるほど複数の疾患に罹患することが増え、その都度複数の診療科を受診する必要が生じます。各疾患に対して手厚い医療が受けられるメリットはある一方で、受診のための時間が増えたり、内服薬が増えて

しまったりするといったデメリットもあります。

(一社)日本専門医機構 総合診療専門医検討委員会は、図に示されるような各専門科領域を「縦串」とした場合、「横串」に当たる包括的アプローチを総合診療専門医に求めています。

専門科領域図



このように総合診療科の守備範囲は多岐にわたりますが、当院は地域の中核病院として、主に次のような診療を行っています。

- ①専門科を特定できない訴え(例えば発熱、体重減少、全身のむくみなど)の患者さんの診療
- ②クリニックから紹介いただいた診断がつかない患者さんの診療
- ③救急外来を受診した患者さんが入院を必要とした場合で、特定の臓器別専門科が扱わない疾患に対する継続的な入院診療
- ④ワクチン接種

①②については、基本的には総合診療科外来で検査・治療を行い、専門科での診療が必要な場合には速やかに専門科に紹介します。

また、患者さんの状態によっては入院で診療を継続します。③の場合も必要に応じて専門科に診察を依頼します。介護などで生活環境の調整が必要な入院患者さんは、医療ソーシャルワーカーと協働して、患者さんとその家族の健康・生活を守ることに努めます。④は成人のみの対応となります。

当院の総合診療科としては、臓器別の専門科と十分なコミュニケーションをとりつつ、単なる「振り分け」外来にならないよう自身の診療の幅を広めていきたいと考えています。あわせて、臨床研修医や総合診療を志す医師の教育にも力を入れていくことを目指していきます。